

栗生沢猛夫著

## 『ロシア原初年代記』を読む

——キエフ・ルーシとヨーロッパ、あるいは  
「ロシアとヨーロッパ」についての覚書——

笈川 侑也

後世のロシアの歴史家によって、キエフ・ルーシ史と呼ばれた、東スラヴ族初期の歴史は、ルーシ地域（およそ現在のウラル山脈以西のロシア、ウクライナ、ベラルーシにあたる）を南北に貫通する「ヴァリヤギからグレクへの道」（ヴァイキングすなわち北欧地域からビザンツへの道、という意味）との関係を中心に記述されてきた。一方、ロシアにおける近年の研究は、黒海沿岸のユダヤ教国家のハザール帝国<sup>①</sup>からキエフを通り、南ドイツへとつながる交易路である「ハザールからドイツへの道」（以下、「東西の道」と略記する）の重要性を指摘している。これらの研究は、キエフ・ルーシで書かれた年代記史料の内容とヨーロッパ各地に断片的に残る「ルーシの人々」（以下では、ルーシ人、とする）の記録を突き合わせることで、ルーシの西方との密接な関係を明らかにした。その研究の一つであるA・B・ナザレンコの研究<sup>②</sup>に依りながら、著者の栗生沢猛夫氏が、「ヨーロッパの中のルーシ」

という、新しいキエフ・ルーシ史像を描き出していたのが本書である。著者によれば、キエフ・ルーシという国家は、東西につながる交易路上に発展したのであり、九、一〇世紀当時それ自体発展途上にあつた「ヨーロッパ」と密接な交流があつた。すなわちルーシの歴史は、これまで研究者が想定していたよりも深く隣国のポーランドやドイツの動向に関連していた。一三世紀中葉のモンゴル人の侵入などによって、それ以降隣諸国と切り離され、独自の発展をしたとらえられがちなルーシ史を、ヨーロッパ中世史の文脈に位置づけた本書の功績は大きい。

以下では、全二章を章ごとに概略を示し、その後に問題点の指摘を行う。内容を紹介する前に、一点だけ断りを入れておきたい。本書は、ルーシの初期の歴史を一つの史料を読み解くことで明らかにしようというものである。対象となる時期がおよそ二五〇年にもなる長大な著作なので、紙幅の都合上、概説的かつ通史的な説明は最低限に収め、詳しい論証に立ち入って内容を説明することは避けた。内容の解説は、本書の中心的な主張である「東西の道」をめぐる、ルーシと「ヨーロッパ」との関係に焦点を当てて記述する。

序「本書のねらい」では、扱われる課題と方法について述べられている。本書は、ルーシ史の根本史料である『原初年代記』（『過ぎし年月の物語』とも呼ばれる）を読み解くことで、ロシアの初期の歴史が「ヨーロッパ」と密接な関係にあつたことを明らかにすることを目的としている。その際の留意点として、本書で扱われるキエフ時代はロシア文化の根源ではあるが、古代中世のロシア史はそれ以後の歴史と不連続の側面があること、つま

り、キエフ時代は、一三世紀以後のモスクワ時代とは異なる性格を帯びたものだったことが強調されている。

第一章「キエフ・ルーシという国」では、主に商業の側面から見たキエフ・ルーシの成立要因と近隣の諸国との関係について語られている。ドニエプル水系を使った交易路である「ヴァリヤールギからグレキの道」だけが当該地域を通る交通路ではなかったことが示される。まず、九、一〇世紀にルーシ地域で出土するディルハム銀貨からヴォルガ水系の交易路に着目する。この時期の黒海沿岸は、ハザールに支配されており、同地域でイスラーム商人とルーシ商人が取引していたことがイスラームの地理学者イブン・ホルダドベールの記述から導かれる。一方、西方との関係として、東フランク王国で出された「ラッフェルシュテット関税規定」から、ドナウ川中流域までルーシ商人が蜜蠟などの商品を扱っていたことが述べられる。上記の史料を中心に分析して、キエフ・ルーシが複数の交易路沿いに成立したことが明らかにされた。

第二章「初期ロシア史に関する史料と「ルーシ」では、以降で分析に使われる『原初年代記』の史料としての性格について言及している。その後、ヨーロッパの史料に現れる「ルーシ」という言葉がどのような人を指しているのかについて考察される。西側の史料であるベルタン年代記の八三九年の記述には、ビザンツ皇帝テオフィロスの使節の中に数人の「ロース」が混じっていたと書かれている。「ロース」とはどのような民族だったのかについて、著者はドニエプル中流域ですでに活動していたスカンディナヴィア系だと推定する。この推論から、『原初年代記』の八六二年の項に記述されているリユーリク招致伝説よりも前から、ス

カンデイナヴィア系がルーシ地域で生活していたことが示された。

第三章「ルーシの洗礼」以前のキリスト教(一)」では、「ルーシの洗礼」と呼ばれるウラジーミル聖公によるキリスト教受容よりも前のルーシ人とキリスト教の関係について論じられる。前述のイブン・ホルダドベールによれば、アラブ諸国で取引を行うルーシ商人たちはキリスト教徒を名乗り、ジズヤを支払っていた。また、ビザンツ帝国の史料からルーシ人が改宗していたことがわかる。これらの史料に現れるルーシ人の改宗は部分的で、一時的だったかもしれないが、ルーシ人がキリスト教に関心を持っていたことが窺える。次に、キュリロスとメトローディオス兄弟の活動とルーシ地域との関係が指摘される。二人の活動は、従来考えられてきたのとは異なり、モラヴィアに限定されていなかった。南ドイツのライヒェナウ修道院に弟のメトローディオスが滞在していたことを確認した後、同修道院と関係する史料が、「東西の道」上の諸地域、諸民族を記述していることに言及する。その史料が、メトローディオス滞在中に書かれたことから、兄弟が得た情報を元に作成され、「ヨーロッパ」側もスラヴ諸族に関心を寄せていたことが推論される。

第四章「ドイツからハザールへの道」上のルーシ」では、前章で示された「東西の道」の実像に迫るため、まず九、一〇世紀のルーシ人が西側とどのような関係を持っていたかを『原初年代記』の記述から考察していく。チェコやポーランドを指す民族名は、年代記中に頻繁に現れ、これらがルーシと深い関係にあったことが示される。次に、ルーシ以外の史料から、「東西の道」の内実を探っていく。前述の「ラッフェルシュテット関税規定」に

は、ルーシ人に関する言及があり、この地域までルーシ商人が奴隸や蜜蠟を運んでいたことが明らかに。またスペインのユダヤ人イブラヒム・イブン・ヤクブの記述によると、ルーシ商人は、クラクフを経由してブラハを訪れていた。以上の史料を中心に、交易路を復原すると、キエフからクラクフ、ブラハを通り、南ドイツへルーシ商人が移動していたことが推定され、ルーシ側も「ヨーロツパ」へ関心を寄せていたことが明らかに。つた。

第五章「オリガの洗礼——ルーシの洗礼」以前のキリスト教(2)では、リューリクの子とされるイーゴリと結婚したオリガを考察対象として、前章までで示されたルーシと「ヨーロツパ」との交流がより具体的に明らかにされる。夫イーゴリが亡くなった九四五年から自身が亡くなる九六九年まで、オリガは子のスヴァトスラフの摂政として政務に就いたとされている。当該時期にオリガはコンスタンティノープルを訪問したことがビザンツ側の史料から確認される。この訪問について、大胆な仮説が提示されている。訪問の目的は、彼女自身の洗礼、通商条約の改正などが挙げられているが、オリガはコンスタンティノープル訪問を不満に感じていたことが『原初年代記』の記述から窺える。この不満を背景に、彼女がドイツ王に接近し、ビザンツ側から譲歩を引き出そうとした、ということが西側の史料にも依拠しながら論証されていく。そしてドイツからキエフに派遣されたアダルベルトが布教に失敗して帰国を余儀なくされたのは、ルーシとビザンツの関係が改善されたことが原因であることが推定された。

第六章「ヤロポルク・スヴァトスラヴィチ公(九七二—九七八年)」では、スヴァトスラフの子で、ウラジーミル聖公の兄にあ

たるヤロポルクに焦点があてられる。『原初年代記』におけるヤロポルクは、弟のウラジーミルとの争いに敗れ、キエフとその大公位を奪われてしまうことが語られるのみで、従来その注目度は、高くなかった。本書では、この兄弟間の争いをドイツ、ポーランドなどの諸国との国際関係の観点から捉えなおしたことで、ヤロポルクが対外関係で果たした役割について興味深い考察が加えられている。まず、ドイツのシエヴァーベン公コンラートが九七〇年代に娘をヤロポルクに嫁がせたことが言及される。コンラートは、チェコ、ポーランドなどと対立していたオットー二世の同盟者であり、ヤロポルクがオットー側についたことが示唆される。同時に、ノヴゴロドに拠点を構えていたウラジーミルには、二人のチェコ人女性が嫁いでいたことから、ノヴゴロド⇨チェコの同盟関係が推論される。ヤロポルクは、九七七年夏に「東西の道」上にある西ブク川上流域をめぐってチェコと交戦しており、この仮説はある程度妥当性のあるものと考えられることができるだろう。

第七章「ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ公と「ルーシの洗礼」」では、ウラジーミル聖公の活動について論じられる。『原初年代記』には、兄ヤロポルクとの争いに勝利し、キエフ大公に就任した後、ウラジーミルが、「リヤヒ」(ポーランド)遠征を行ったという記述がある。この遠征について、事実ではなかったと疑問視する研究者もいるが、本書では、当時のドイツとチェコとポーランドの関係から、一つの仮説を提示している。九七八年のドイツとチェコの和解と九七九年冬にオットー二世がポーランドを攻撃したことを背景に、ウラジーミルもドイツの動きに連動して遠征を起こした可能性がある。その後、論は「ルーシの洗礼」

へと移っていく。ここで著者は、ビザンツの史料などを用いて、『原初年代記』に記された「ルーシの洗礼」の内容は、後の時代の編集による宗教的な脚色を帯びており、事実を反映したものであることを明らかにしている。

#### 第八章「呪われた」スヴァトポルクとヤロスラフ「賢公」

——大公位継承争いと「ボリス・グレープ」崇拜の成立——では、ウラジーミル死後に起きた、その子供たちによるキエフ大公位をめぐる争いとその過程で殺され、後にルーシ初の聖人となったウラジーミルの子供ボリスとグレープについて論じられている。父の死後キエフ大公となったスヴァトポルクとノヴゴロド公だったヤロスラフとの争いは、一〇一九年に決着し、ヤロスラフが大公位を継ぐこととなった。この内乱期に起きたボリスとグレープの死について、著者は興味深い説を紹介している。この説によれば、ボリスとグレープは、ウラジーミルにビザンツから嫁いだアンナの子供であり、兄弟の殺害はビザンツへの従属を恐れる他の兄弟たちの陰謀によるものだった。もちろん著者はこの仮説を全面的に受け入れてはいるわけではないが、魅力的な説明として評価している。

第九章「賢公」ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ」では、前章で示唆されたルーシとビザンツの関係が展開されていく。ヤロスラフによる立法活動に言及した後、国内のキリスト教普及の問題とビザンツとの関わりについて論を進めている。ヤロスラフによる、初のルーシ出身のキエフ府主教イラリオンの抜擢の背景について、著者はビザンツからの自立的志向を過度に強調することに同意しない。また、ヤロスラフの対外婚姻政策の観点から、結

婚の数を比較した研究が引用され、ルーシの公家が、例外的にビザンツと密接だったわけではなく、むしろポーランドなど西方諸国との婚姻関係を望んでいたことが示され、次章への橋渡しがされている。

第一〇章「ルーシと西方諸国」では、西方との関係として、まずルーシとスカンディナビアの関係が、次にルーシ公家による婚姻政策が言及されている。近年ロシア国内で注目されるようになってきた北欧地域との関係について、著者はサガなどの北欧の文学作品を用いて、ルーシを訪れたノルウェー王の足跡をたどっている。また、ルーシと西方諸国の密接な交流を、ヤロスラフとその子らによる西方諸国との婚姻を事例にして裏付けようとしている。中でもヤロスラフの孫にあたるエウプラクシヤとハインリヒ四世の結婚は、二つの点で興味深い。まず、この結婚自体がルーシとドイツの結びつきを間接的に証明するものだが、彼女は結婚して間もなく叙任権闘争に巻き込まれ、教会側に利用されるなど、彼女の存在が中世ヨーロッパの教会と政治に影響を与えた。次にこの婚姻が一〇八〇年代に行われたことは、一〇五四年のいわゆる東西教会の分裂以降も、ルーシは西側との関係を維持していたことを意味している。これらの婚姻政策の背景には、ルーシの国際的地位の向上と威信の拡大を志向するルーシ諸公の動機が存在した、と著者は推定している。

第十一章「ヤロスラフ後のルーシ」では、ヤロスラフ死後の一世紀後半のルーシ内部の政治状況について論じている。ここで問題となっているのは、研究史上「ヤロスラフの遺言」と呼ばれる、『原初年代記』に記述された彼の指示である。この「遺言」

では、子供たちに都市を分け与え、危機の時には互いに協力するよう求めている。このような「遺言」が年代記中に現れるのは、このヤロスラフによるものしかなく、また記されている言葉からは、公国の統治制度を把握することが困難である。著者は彼の死後の情勢を『原初年代記』を中心に用いて、分析し、以下の結論に至った。「遺言」はルーシ内の最大権力者のキエフ公の過度の強大化を阻止し、同時に内紛を防止するための苦肉の策だった。

第二章「一〇五四年と一一〇四年——離間するルーシと西方世界」では、東西教会の対立に決定的影響を与えた二つの事件をキエフ・ルーシの教会がどのように見ていたかを考察している。まず一〇五四年の教皇による総主教の破門について、ルーシの

『原初年代記』には記載されておらず、この事件がルーシにおいて大きな意味を持たなかったことが示された。また、一一〇四年の十字軍によるコンスタンティノープル占領は、ルーシの年代記に記述があるが、その内容は、むしろ中立的で、ルーシ社会が反カトリックに舵を切る契機にはならなかった。

結語では、一二章にわたって考察されてきたルーシとヨーロッパの関係についてまとめられている。繰り返すを避けるため、詳細は省略するが、著者は次の二点を強調して、本書を閉じている。第一に、後のロシアで見られる、反ヨーロッパ的な意識が当該時期にはなかった。第二に、ルーシ人は自らをキリスト教徒として認識し、キリスト教世界、すなわち「ヨーロッパ」の一部を構成していた。

本書の特徴は、史料が少なく、これまで研究が困難だった初期キエフ・ルーシの歴史を、諸外国の史料と『原初年代記』の記述

を突き合わせることで、年代記中で語られる隣国との戦争、交渉などの事件に興味を持たせ、ポーランド、チェコ、ドイツの中世史との関係の中で把握したところにある。このような意味で、本書は画期的であり、ロシアの古い時代の歴史について、質と量の両面で充実した記述を日本語で読むことができるようになったことは、同じ地域を研究する者として喜ばしく思う。

本書の構成についても付言される必要があるように思われる。本書は、著者本人が認める通り、ナザレンコによる研究から多くを学び、影響を受けていることは否めない。この影響が顕著に観察されるのは、章の構成である。本書は、ナザレンコの研究とはほとんど同じ章の順序となっており、両書ともに「東西の道」について言及した後、それぞれの公に焦点を当てて、西方との関係を考察している。また多くの章でナザレンコの研究を評価し、もしくは彼の見解を紹介しただけにとどまっている。しかし日本における当該分野の研究状況がまだ十分ではないことを考慮すれば、先行研究の優秀さを評価することはできても、この点から本書の評価を貶めることはすべきではない。

以下では、評者が考える論点を三点開陳したいと思う。

まず、一点目は成立期のキエフ・ルーシと東方との関係である。本書の主たる主張は、キエフ・ルーシをキリスト教圏、特にドイツなどのカトリック圏諸国との関係の中で把握するべきだ、というもののだが、西方との関係を重視するあまり東側との関係を軽視しているように思われる。本書の中で強調されている「東西の道」について、第四章以外で東側との関係が記述されることは少なく、「東西の道」における東側とルーシの関係がどうなってい

たかがはっきりとは見えてこない。しかし、日本ではすでに東洋史研究者の愛宕松男氏によって指摘されている通り、キエフ・ルーシの度量衡システムは、東のハザール帝国やイスラーム教圏の強い影響のもとに成立したものであった。また、著者が参考にしたナザレンコの研究では、本書の第四章にあたる「東西の道」に関する章の後に、度量衡の問題について一章分割かれている。本書では、この問題が取り扱われないことによって、「東西の道」における西側の影響が過度に強調されてしまっているのではないか。

次に、二点目はキエフ・ルーシの政治制度とその政治的一体性に関する問題である。本書は、『原初年代記』が書かれたキエフとキエフ公の活動が中心に記述されており、キエフの重要性を過度に評価してしまっているように思われる。これは、キエフ・ルーシを「東西の道」に位置づける際に、キエフがその通り道であることと関連している。例えば、第二章において、ベルタン年代記に現れるスカンディナヴィア系の「ロース」は、どこに居住していたかという問題について、著者は、アラブ銀貨が出土するノヴゴロドやヴォルガ川沿いではなく、キエフの付近にいたのだと結論付けている。ここで著者が根拠としているのは、史料に「ロース」の首長の称号として現れる「カガン」である。著者はハザール帝国の影響で「ロース」の人々がこの称号を使ったとして、ハザールに最も近い南のキエフ以外の地域の可能性を排除している。しかし、著者も指摘するようにこの時期にスカンディナヴィア系住民が定住していないならば、アラブ銀貨が出土する南北の交易路上のノヴゴロドやヴォルガ川流域に滞在していたスカ

ンディナヴィア系がハザールやさらに南のビザンツ帝国を目指して移動していたという可能性を排除することはできないように思われる。また、キエフと他の都市との関係性やキエフ大公と他の都市の公との関係がどのようなものだったか、十分に言及されないまま、「ヤロスラフの遺言」のようなキエフ・ルーシによる一円支配の確立を示唆する史料を扱うことは、キエフ・ルーシの一体性を指定してしまふことにならないだろうか。この「中央」と「地方」の関係が不明瞭なままでは、キエフ・ルーシがどのような構造を持った共同体だったか把握することはできないだろう。そしてこの問題は、果たしてキエフ・ルーシに共同体としての一体性があったのか、ということにも関わっている。

最後に、三点目は、ないものねだりではあるが、後の時代との関係についてである。本書は『原初年代記』を読み解くという性質から年代記の記述が終わる一一世紀末のヤロスラフの孫の代で叙述が終わっている。しかし著者がこのキエフ時代をロシア文化の根源としてとらえるのなら、キエフ・ルーシがどのように変化し、現在へとつながるのか、また断絶するものはないものかについて言及してほしかった。このように考えるのは、この問題が、本書の主張の核となっているロシアと「ヨーロッパ」との関係にも深くかかわっているように思われるからである。著者は、前著『タタールのくびき』(二〇〇七年)で、一三世紀以後の「タタール」の襲来とその支配について、その実像を研究した。結論部で、著者は、「ルーシ人は「ルーシの正教徒」を称したのであり、西方のキリスト教徒と同じではなかったのである。このロシア(ルーシ)を「東と西のあいだ」の存在と呼ぶか、あるいは

は「ユーラシア」ないし「ロシア（ルーシ）」と呼ぶかは、そう本質的なことではない」と述べており、前著と本書の間に著者の考え方に変化が見られる。<sup>⑥</sup>後の時代の西側との関係について、異質性を強調していた著者が、本著ではキエフ・ルーシが「ヨーロッパ」の一部のなしていたと主張していることは、対象とする時代が異なるとはいえ、やや疑問が残る。この点を明らかにするためにも本書が対象とする時代から、モスクワが台頭してくるまでの時代の変化を記述してほしかった。

以上、論点を指摘してきたが、これらの指摘は本書の評価を下げるものではない。上述の課題は、むしろ、我々後進の研究者に託されているのである。

① ハザール帝国について日本語で読めるものとしては、S・A・ブリエートニエヴァ（城田俊訳）『ハザール謎の帝国』新潮社、一九九六年、が挙げられる。

② A. B. Назаренко Древняя Русь на международных путях: междисциплинарные очерки культурных связей IX—XII веков. М. 2001.

③ ビザンツの条約の内容については最近刊行された、斯波照雄・玉木俊明編『北海・バルト海の商業世界』悠書館、二〇一五年、に詳しい。

④ 愛宕松男「蒙古史の一側面としてのロシヤ史——モスクワ王國の成立過程への考察——」『史林』三〇一四、一九四五年、一四一—一五頁。

⑤ A. B. Назаренко Указ соч. с. 113-218.

⑥ 今村栄一はキエフ・ルーシの一体性を疑問視している。彼はキエフ・ルーシにおける「辺境」のガリーチ公國についての考察の中で、ガリーチ公家が元々リユーリクの子孫ではなく、キエフ・ルーシに帰順した後に家系図に組み込まれた、つまり年代記制作者による創作の

可能性があると指摘した。今村栄一「キエフ・ルーシの「辺境」における「公」のあり方」『古代ロシア研究』二〇、二〇〇〇年、六三—九四頁。

⑦ 粟生沢猛夫「タタールのくびき——ロシア史におけるモンゴル支配の研究」東京大学出版会、二〇〇七年、三七—一頁。また、以下のようにも述べている。「モンゴル支配の意味を問うということは（中略）従来のロシア史像の「西方的偏向」を具体的に正すきっかけとなりえよう」（同書、三六八頁）。

（A5判 一〇五六頁 二〇一五年二月 成文社）

税別一六〇〇〇円）

（京都大学文学研究科修士課程）